

7 「わたしはおねえさん」(二年下)



ちよつと確認

なぜ今、言語活動なのか

今回は、「わたしはおねえさん」(二年下)を例に、指導事項と言語活動・教材・児童の実態から授業を組み立てていく教材研究のしかたについて述べていきたいと思っています。しかし、その前に、よい機会ですから「単元を貫く言語活動」について振り返っておきたいことがあります。そもそも、なぜ、「言語活動の充実」は求められているのでしょうか。

もともとの背景には、中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」(平成二十年一月) 答申があります。ここには、「知識・技能の活用など思考力・判断力・表現力等をはぐくむ」ために重要なものとして、六つの学習活動例が掲げられています。

平成二十年告示の学習指導要領にはこ

の内容が色濃く反映されました。とりわけ顕著なのは「総則」(第4 2①)であり、どの教科等の指導においても、単なる知識理解にとどまるのではなく、それらを活用して思考力・判断力・表現力を育成する学習活動、いわゆる「言語活動」を位置づけることが求められています。

そこで、国語科の役割です。前述の中央教育審議会答申では、国語科の改善の基本方針が「言語の教育としての立場を一層重視し、……各教科等の学習の基本となる国語の能力を身に付けること」と明記されています。この「国語の能力」が、学習指導要領に「二年下」で示された、三領域一事項の指導内容なのです。こうした改訂の趣旨からも、国語科が担う役割の大きさを再認識することができると思います。

指導事項・言語活動を
確認しよう

「言語活動の充実」が取り上げられる理由、国語科への期待の大きさについて認識できたところで、「わたしはおねえさん」の教材研究に入っていきたいと思います。

まずは、教科書で想定されている指導事項の確認です。教科書P48冒頭、単元名には、「お話のじんぶつと自分をくくって読もう」とあります(※1)。これが児童に示された、学習の目標です。そして、リード文(※2)には、この文章をどう読んでいくかという、児童にとつての心構えが二つ掲げられています。それぞれ、どのように読むことを促しているのか、そして、どんな指導事項と結び付いているのかを考えてみましょう。

一つ目、「すみれちゃんは、どんなことをしましたか。」では「行動に着目する」

※1

お話のじんぶつと自分をくくって読もう

すみれちゃんは、どんなことをしましたか。あなたなら、どうしますか。

※2

歌を作るのが好きなすみれちゃんが、また一つ、歌を作りました。こんな歌です。

わたしはおねえさん

やさしいおねえさん
元気なおねえさん
ちっちゃなかりんのおねえさん
一年生の子のおねえさん
すこいでしょう

49

けさも、この歌を歌っています。

十月の日曜日の、気もちよく晴れた朝でした。そんな朝にこの歌を歌うと、お天気も、すみれちゃんの気もちも、もつとびかびかとかがやのように、すみれちゃんには思えるのです。そして、えらいおねえさんになって、りっぱなことをしたくなりました。

「そうだ。」

と、すみれちゃんは言いました。

それから心の中で、「えらいおねえさんは、朝のうちにしゅくだいをするんだわ。」と言いました。

50

ことが示唆されています。ここから、学習指導要領（第一学年及び第二学年「読むこと、以下同）の指導事項、

ウ 場面の様子について、登場人物の行動

を中心に想像を広げながら読むことを、児童に理解しやすい言葉で表現していることが分かります。続いて二つ目、「あなたなら、どうしますか。」は、「私だったら」と自分に引き付け、自分と比べながら読み進めることを呼びかけています。

才 文章の内容と自分の経験とを結び付けて、自分の思いや考えをまとめ、発表し合うこと。

がここに表れているのです。これはまた思考の面では、「比較する」ことを促しているのだともいえそうです。

いっぽう、教科書P 60、学習の手引きでは、「じんぶつと自分をくらべて、かんそうを書く」と示されています。これが、全12時間（教科書で想定されている本単元の時間数）の学習を通じて取り組む「単元を貫く言語活動」だということが見て取れるでしょう。学習指導要領の言語活動例である、

工物語や、科学的なことについて書いた本や文章を読んで、感想を書くことに対応しています。

児童の実態と教材を勘案して

学習指導要領の内容が二学年くくりであることには、じつくりと時間をかけ、らせん的に反復しながら学ぶことで、各領域の能力の確実な定着を図るという意図があります。同じ学習内容であっても、入学して間もない第一学年と、第二学年とでは、できることや求めたいことに差があるのは当たり前です。「文章の内容と自分の経験とを結び付けて」読むにも、経験があることや知っていることを見つけるなどから始まって、それについて「自分だったら」という考えがもてるようになるなど、さまざまな具体化が考えられます。

そう考えると、指導事項を「自分と比べて」と言い換え、「感想を書く」という言語活動を通して、その読みの力を身につけさせるというのが、第二学年の単元での大きなポイントといえるでしょう。

させるのです。教材の分析をもとに、そのとき注意させたいことを書き出してみます。

- ・「かりん、何してるの。」↓前行「おどろいて」に着目させ、抑揚・語調を意識させる。

- ・「おべんきよ。」↓「おべんきよう。」と比べ、かりんちゃんの幼さを共有する。
- ・「もう、かりんたら、もう。」↓句読点に着目させる。

・「何よ、これ。」↓知りたかったわけでもないのに「何よ」と言っただすみれちゃんの様子を、児童自身の体験を通して想像させる。

「じつと、ノートを見ていました。」(P55)と「もういちど、ノートを見ました。」

じつと。ずっと。」(P 57)を比べて音読させることでも、句読点の効果的な使われ方に気づかせることができそうです。動作化も取り入れれば、語彙力の弱い児童も、主体的に学習に参加できます。

いっぽう、児童の実態を考えたとき、『人物と自分を比べる』ほどには、すみれちゃんに同化できない」など、教材が「わたしはおねえさん」だけでは不十分

もちろん、「わたしはおねえさん」という教材が、児童と同じ二年生の子を主人公とした作品であることも、指導事項・言語活動の設定に大きく関係しています。

児童の姿をイメージしながら読む

では、実際に教材を読んでいきます。当然、そのときには自分のクラスの児童の姿をイメージすることが欠かせません。「どの場面で、どんな感想をもつだろう」などと想像しながら、児童の気持ちになつて全文を読んでみましょう。歌には自分で節をつけて音読することが大切です。児童が反応しそうな叙述に立ち止まりながら、読み進めます。

例えば、教科書P48～51で、児童の共感を誘いそうな叙述に線を引きました(前ページ参照)。ここでは、歌を歌うと、

な場合があるかもしれません。そんなとき、並行読書という方法があります。教科書P62の☆の課題にあるような、等身大の人物が出てくる他の物語や、「本は友だち」にあるような、すみれちゃん他の物語を、授業と並行して読むのです。読書の時間なども活用しながら並行読書を進め、魅力的な等身大の人物を探すことで、「自分と比べながら読み、その感想を交流する」という言語活動がさらに充実したものとなるはずです。そして、それは、身につけさせたい「読むこと」の力のより確実な定着に結び付きます。ただ、並行読書を取り入れるかどうかは、単元の構想時に、ねらいと児童の実態に照らしてしっかりと考え、意図的な計画に基づいて判断することが大切です。

自ら考え、自ら判断して、自主的な問題解決を図る——「生きる力」は、こうした授業展開から生まれます。そして、それを支えるのは教材研究です。児童の姿を思い浮かべながら反応を予想し、気づかせたい言葉を厳選し、支援の手立てを工夫して授業に臨みましょう。

授業を組み立てる

気持ちまでぴかぴか輝くように思えるすみれちゃんに、「私と似ているな」などと、自分を重ね合わせながら読み進める児童の姿が浮かんできます。「読んでいるうちに、幸せな気持ちが湧いてきます」という感想も聞こえてくるようです。

実際に読んでいく過程については、過去にも何度か取り上げました(※3)ので今回は省きますが、残りの部分も同様に読み進めていきます。物語の山場や、学習の手引きにある課題の使いどころについても意識しながら読むと、より授業がイメージしやすくなります。

分析したことをもとに、授業を組み立ててみます。人物と自分を比べて読むためには、「その場面に自分を置いてみる」学習が有効です。そのために、出来事・他の人物・周りの状況との関わりが顕著な場面を、役割読みするという手立てを考えます。つまり、教科書P54～57をすみれちゃん、かりんちゃん、地の文役の三人一組で、交代しながら何度も音読

こしみず・かおり

広島県生まれ。二十三年の教員生活の後

港区教育委員会指導主事、東京都教育庁主任指導主事、小学校校長等を経て

現職。光村図書小学校『国語』教科書の編集委員を務める。

※3 「教材研究のススメ」 1（小誌74号）、2（小誌75号）で特に詳しくご説明しています。